『DEREK』第 38 号（2018 年）

C. S. ルイスのキリスト教への道のり

岡田　理香
OKADA, Rika

目 次

はじめに
1.　『喜びの訪れ』に見られるルイスの原体験
　1. 1.　幼少期
　1. 2.　「喜び（ジョイ）」と呼ぶ体験
2.　神話への傾倒
　2. 1.　北欧神話への憧れ
　2. 2.　「喜び」の追求をやめる
3.　「回心」体験
　3. 1.　「絶対的なもの」から神へ
　3. 2.　キリストへの「回心」──トールキンとの対話
　3. 3.　トールキンとの対話に関するルイスの書簡
おわりに

はじめに

C. S. ルイス（Clive Staples Lewis, 1898–1963）は今日ではキリスト教作家として知られているが、彼はかつての自分を「無神論者」と位置づけていた。30 代になって信仰をもったと公言し、「回心[1]」と呼ぶ体験を後に『喜びの訪れ（*Surprised by Joy*）』（1955[2]）に残している。それによると、彼は幼少期から教会に参加してきたものの、少年期にはキリスト教を離れたという。そして青年期には哲学的思索から神を探求し、やがて 32 歳の時、1931 年にキリスト教を受け入れたとしている。

彼の「回心」に着目したこれまでの研究は、この『喜びの訪れ』に依拠したものがほとんどであり、ウォルター・フーパー（Walter Hooper, 1931–）や A. N. ウィルソン（Andrew Norman Wilson, 1950–）、ハンフリー・カーペンター（Humphrey Carpenter, 1946–2005）などによって為されてきた[(3)]。これらの研究では、最初に彼の「無神論者」とする時期、やがて神を神と認めた有神論への「回心」、その後のキリスト教への「回心」といった経緯を述べるものが主流であった。

それらと異なる視点からアプローチしたのがアリスター・マクグラス（Alister Edgar McGrath, 1953–）である。マクグラスは『喜びの訪れ』を「ルイスの生涯について書かれた本というよりは、人生そのものについて書かれた本として読むべきである[(4)]」と述べている。つまり、自伝ではなく人生論としてこの書を捉えているのである。

さらにマクグラスは、ルイスが『喜びの訪れ』で神を認めたと主張している年を 1929 年と記述していることに対し、その年が間違っていたという説を示している。その根拠の一つは『喜びの訪れ』の「回心」の大切な部分に至って、ルイスは「思い出せないので推測する[(5)]」と書いていることである。

確かに『喜びの訪れ』は「回心」に至った経緯を知りたいとの人々の要望に応えるために書かれ、出版されることが前提となっていた[(6)]。そのため、ルイスが自身の生涯を顧みて自分の人生の断片を編纂し、キリスト教への「回心」体験を読者に示すことを意図して書かれたと見ることもできる。さらに、ルイスの「回心」体験から 20 年以上も後に書かれていることを見落としてはならない。つまり、20 年以上前のおぼろげな記憶から掘り起こして執筆しているため（当時のルイスは日記をつけていなかった）、その詳細な部分については信憑性が薄いと考えられる、ということになる。

マクグラスによると、「1929 年夏学期に神を認めた」とルイスが述べているが、実際には 1930 年の夏学期だったという。1929 年の夏に神を信じたのであれば、その年の 9 月に父が亡くなった後に、ルイスが友人

たちに宛てた手紙に、何ら変化が見られないことは不可解であることを理由としている。さらに、その年の書簡には、ルイスの礼拝出席への言及が見られないことも挙げられている。

そして、マクグラスがルイスの「回心」を 1930 年とした決定的な根拠は、『喜びの訪れ』で述べられる「回心」の内容と極めて類似した表現がその時期の書簡に見られることである。「回心」当時、ルイスは自分に対して神が「攻撃をしかけ」、さらに「神が迫ってくるのを感じた」[(7)]、と『喜びの訪れ』に書いている。それに似た表現として、1930 年の書簡に「恐ろしいことが私の身に起きた。『霊』［──略──］が、［私に対し］もっと個人的に関わるようにと、神のように働きつつ攻撃している」[(8)]と記されている。

こういった表現は 1929 年の書簡には全く登場せず、1930 年に入ってから見られるとマクグラスは指摘する。さらにルイスが礼拝に出席していたのは、1929 年でなく 1930 年 10 月と書簡から特定できる。これらのことからマクグラスは、ルイスが神を認めた時期を、『喜びの訪れ』で述べられている 1929 年夏でなく、1930 年であるとしている[(9)]。

確かにマクグラスの述べる通り、『喜びの訪れ』には「記憶が定かでない」[(10)]とある。また、上記の書簡に導き出された「1930 年に回心した」という説は『喜びの訪れ』と表現が一致している。ただ、このことを追及してしまうと回心研究へと方向を転じてしまう可能性がある。ここでは『喜びの訪れ』は、マクグラスの述べた通り、自伝というよりは人生そのものについての書としての読み方もあると指摘しておくに留めたい。ただ、マクグラスの研究は、『喜びの訪れ』で述べられていることですら、一次資料的に扱うことはせず、十分に精査すべきである、という一石を後の研究者に投じたことは確かである。

さて、マクグラスは「回心」の年を検証しているものの、その経緯に「神話」が重要な役割を担っていることについては述べていない。また、ルイスの幼少期や少年期にまでさかのぼって「回心」の源を見出そうという試みはされてきていない。マクグラスは自らの説を検証するのに書

簡を用いているが、同様に書簡に目を向けるのなら、書簡に少年期から晩年まで登場する「神話」という事柄にこそ、「回心」の道のりを示すものを見ることができるのではないだろうか。

ルイスのキリスト教の原点は、子ども時代に愛読した「神話」に見出せる可能性がある。なぜなら後に見るように、「回心」の際にキリストの物語を「真実の神話」と見なしたとの表現が繰り返し見られるからである。

ルイスは「回心」後、「初期の散文の喜び（Early Prose Joy）」で「キリスト教信仰へと後戻りした過程を記述しようと思う[11]」と書き残している。それからしばらくして書かれた『喜びの訪れ』では、幼少期にキリスト教の教えを受けた後、一旦無神論者と自らを位置づけ、その時期を経てキリスト者になったと書かれている。そのために「回心」を「後戻りした」と表現されているのであろう。だが「後戻り」とは実はそれだけでなく、かつて愛読した「神話」の価値を再認識する道であったと捉えることも可能ではないか。

これらの文脈を踏まえて、本稿では『喜びの訪れ』で述べられている「回心」への経緯をもとに、ルイスはどのように考え方を変え、自分をクリスチャンと呼ぶようになったか検討する。さらに、そこに「神話」が関わっていることに着目したい。

第 1 章では、ルイスが『喜びの訪れ』で記述している原体験を確認する。ルイスの出自、キリスト教の源と、「回心」への道のりの原点を探求する。

第 2 章では、ルイスの原体験から「神話」への傾倒を追う。その際、ルイスが少年期から晩年まで文通を続けたアイルランドの友人、A. J. グリーヴス（Arthur Joseph Greeves, 1895–1966）との書簡を用いたい。その書簡はルイスが 15 歳の年 1914 年から亡くなる年である 1963 年までがまとめられているため、ルイスの成長と共に思考の変化を追うには有効だろう。

第 3 章では、「回心」のきっかけとなったとされる J. R. R. トールキンとの「神話」をテーマにした対話について述べる。「神話」の重要性と「回心」への道について考察する。最終的には、彼のキリスト教の源は、「神話」にあったということに言及することになるだろう。

1.「喜びの訪れ」に見られるルイスの原体験

本章では、『喜びの訪れ』からルイスの生まれ育った環境を確認する。ルイスの出自から幼少期、少年期、青年期までを、ルイスが回顧する形式で書かれている。ここではこの資料と、伝記作家らのルイス伝をもとに、ルイスの幼少期、少年期について述べる。

1. 1. 幼少期

『喜びの訪れ』でルイスは自らの幼少期を回顧しているが、彼に関わった重要な使用人として乳母リジィー・エンディコットが挙げられている。ルイスは彼女の話す神話や妖精物語に聞き入り、強烈な印象と興味を抱いたと述べている[(12)]。また、兄ウォレンの名が挙げられている。この兄はルイスとほとんどの時間を共に過ごした遊び友達というだけでなく、物語を一緒に創作する仲間でもあった。今も残る作品が『ボクセン（*Boxen*）』である。架空の国ボクセンでは、動物たちが立って歩き、言葉を話し、人間と同じように生活する様が描かれている。『ナルニア国年代記（*The Chronicles of Narnia*）』（1950–1956）の原点をここに見ることができるだろう。ルイス兄弟は、ボクセン国の歴史や人種、地図をも創り上げた[(13)]。

一方幼少期には「宗教的経験（religious experiences）は皆無であった[(14)]」と『喜びの訪れ』で回顧されている。だがルイスは、幼児洗礼を受けて教会に通っていたことから、この時期がキリスト教と接した始まりといえる。また、注目すべきは「神話」が介入してきた時期がこの頃であったということである。この幼少期は「神話」が乳母によって語られ、「執筆行為」へと促された始まりと見なすことができよう。

1. 2.「喜び（ジョイ）」と呼ぶ体験

『喜びの訪れ』のタイトルにある「喜び（ジョイ）」とは、幼少期の読書体験などをもとにし、彼が長い間追及したある種の経験である。その「喜び」を「ある意味、私の人生の中心をなす物語である[15]」と見なしている。成人した後も、その感覚が再び訪れることを探り求めていたと記されている。この「喜び」について前述の全てのルイスの伝記作家が重要事項と見なしていることから、ここではこの「喜び」と表現されていることについて論じておきたい。

『喜びの訪れ』で挙げられている「喜び」の体験は三つある[16]。一点めが兄の作った箱庭を思い出した時、二点めがビアトリクス・ポターの『りすのナトキン（*Squirrel Nutkin*）』（1903）を読んだ時、そして三点めに「テグネールの頌詩（Tegner's Drapa）」を読んだ読書体験である。その詳細は以下の通りである。

第一の「喜び」体験は、兄の箱庭である。兄ウォレンがクッキーの空き缶の蓋に苔を敷いて小枝や花で飾った小さな箱庭を作って、子ども部屋に持ってきたという。『喜びの訪れ』では、その箱庭を見て初めて「美」というものを知ったと記されている。ところが「喜び」はこの箱庭を見た時ではない。その日からしばらく経ち、ある日、花の咲くスグリの藪のそばに立ったルイスに、その箱庭の思い出が甦ってきた時である。それは「何世紀も昔から現代に訪れてきたように感じられた」と表現されている。その興奮状態は表現が難しく、ジョン・ミルトンがエデンの園を形容した「法外な祝福（enormous bliss）」という言葉がそれに近いと述べられている。彼は「楽園」を想像する時には、この箱庭を思い出したと回想している。

第二の「喜び」体験には、ビアトリクス・ポターの『りすのナトキン』の読書体験が挙げられている。ポターの作品の中でも『りすのナトキン』にある「秋の観念（the Idea of Autumn）」が特別な季節の魅力だったと表現されている。それは日常生活とは異質なもの、「別の次元にあるもの（in another dimension）」と書かれている。

第三の「喜び」体験には、「テグネールの頌詩（*Tegner's Drapa*）」が挙げられている。これは北欧神話のバルドルについての詩である。バルドルはヤドリギで射られて死に至る神だが、ルイスはこの詩を読んで、「心が北の空の壮大な領土に引き上げられた」と回想している。また、ただ心を惹かれただけでなく、「遥か遠い場所から届いたような声」で「『別世界』を渇望した」感覚であった[17]と表現されている。

では、ここでこれら三つの「喜び」体験に少し立ち入ってみよう。

最初の箱庭のエピソードでルイスは「美」を意識し、それを「法外な祝福」と表現した。エデンの園を想起させ、ルイスもミルトンと比較させているところから、堕罪前の楽園つまり穢れなき楽園に憧れを抱いていたと考えられる。この穢れなき楽園は後の作品、たとえば『ペレランドラ（*Perelandra*）』（1943）にも見ることができる。

『ペレランドラ』は、ランサムを主人公とする火星、金星、地球を舞台とした三部作の第 2 巻で、金星に旅する物語である。金星に到着したランサムは、その星に住む女性と出会う。彼女はやがてこの星の女王となる者であった。ランサムとの会話の中で、彼女は純粋な心をもつために「悪」という概念を理解できないということが分かる。やがてランサムは金星に宇宙船が着陸するのを目撃し、かつて火星で対峙したウェストンが降り立つのを見る。悪意に満ちたウェストンは、彼女に悪の心を植えつけようとするものの、ランサムがそれを阻止して彼と戦う。ランサムの勝利により、金星のその女性は悪に陥らず、王と共に星を治める立場に君臨する、といった物語である[18]。

ルイスは『ペレランドラ』について、出版後にインタビューを受けていた。その中で、「もし今どこか他の惑星で、最初の男女が、この世界でアダムとエバと同じ経験をし、しかも彼らの場合、誘惑を見事に退けることができたなら」という仮定で「堕罪のない世界」を描いたと述べている[19]。この言葉からルイスの想定する「楽園」とは、堕罪のない世界であり、穢れなき楽園なのではないか。それはミルトンの形容したよう

な楽園に似た世界ということもできよう。ルイスの原体験の第一のエピソードは、そういった楽園に惹かれていた経験と理解できる。

次の体験『りすのナトキン』の「秋の観念」とは何であろうか。『喜びの訪れ』では、「秋の観念」は「別の次元に存在するもの」として表現されている。秋とは植物が死滅し再生の準備へと向かう時期である。このことから、死んで新たな生命を得るものへ渇望を抱いていたと理解することもできる。これは第三のエピソードとも重なるものであるため、同時に取り上げて考察したい。

第三の「テグネール」は、死すべきでない魂が死に運命づけられてしまった物語である。生命の死と再生という意味で、第二のエピソード「秋の観念」と第三のエピソード「テグネール」は共通点があるといえよう。それは植物も神々も一旦死んで新たな生命を得るという点で一致している。ルイスは後年『奇跡論（*Miracles*）』（1947）で、植物や神々の生命が一度は下降し再び上昇することに言及し[20]、キリストと比較している。ルイスは以下のように疑問を呈している。

> キリスト教の教義とは、この［下降と上昇の］パターンをどこか他のところ、特に毎年の穀物の死と復活を見ているうちに、人の心に入り込んできたものなのか。というのは当然のことながら、年ごとに繰り返されるドラマをほぼ例外なく中心的な信仰としている多くの宗教があるからで、それらの宗教における神、アドニス、オシリス、その他はまた、ほとんど明らかに穀物の擬人化、毎年死んで生き返る穀物王だからである。キリストは単にもう一人の穀物王なのではないか[21]。

こう述べられていることから、人々の信仰の中心となり得るものに、毎年の植物の死と再生、さらに宗教の神々の死と復活にルイスが後年も重点を置いていたことが理解できる。さらにそれがキリストと比較されているところから、この「喜び」の体験は、先取りして述べてしまうと、

やがてキリストに繋がっていくものではないかと推測される。ちなみにルイスはこの穀物王の文に続いて、「キリストは穀物王と異なり毎年死んで生き返ることをしない」、「キリストが穀物王に似ているのは、穀物王がキリストの肖像だからだ」[22]と述べて、キリストが穀物王の源であることを示唆している。

さて、ルイスは『喜びの訪れ』で「喜び」と呼ぶ三つの原体験を回顧しつつ、その特徴を以下のようにまとめている。

①何かに対する渇望（desire）
②幸福やただの楽しみと共通する特徴を備えつつもそれらとは明確に区別されるもの
③読書などを通じて突然訪れるもので、一時期充足感を与えるが人間の意のままにならないもの[23]

この特徴を踏まえた上で三つの原体験を見直してみると、その原体験を貫く事柄があると考えられる。それはまず現実世界から別世界を見ているという現象である。「箱庭」の思い出、「秋の観念」、「テグネール」、これらの中で第一のエピソードでは花の咲く頃に箱庭が思い出され、第二のエピソードでは植物の死する秋に特別な思いを抱き、第三のエピソードでは死んで復活する神の物語に渇望を感じたという体験であった。それが過去のことである場合や物語の中である場合と様々であるが、別世界への希求という点で一致している。これがルイスの述べる特徴①の「渇望」といえよう。

また、その「渇望」は「楽園」そして「死と再生」への「渇望」と見なすこともできるだろう。これらは死と再生を伴う「楽園」ということもできる。加えて、それはルイスの述べる特徴②の「幸福やただの楽しみとは明確に区別されるもの」との繋がりを見いだすこともできよう。

さらにこれらの「喜び」は決して満たされることがない点も付け加えておくべきである。つまり「喜び」は別世界でありながら、それを遠く

から眺める行為であり、それでいて限界があって充足されることのないものなのである。ルイスが述べる特徴③で「人間の意のままにならない」と述べていた通りである。

ルイスは読書などのたびに、この体験が訪れるのではないかと期待していたという。ルイスにとって「喜び」はある時点までは重要だったと見られる。だが、ある時から「喜びの追及をやめた」と書いている。それは後述する読書体験や周囲の人々との議論により、「喜び」から離脱したという。「喜び」の代替となったものを見る前に、ルイスの少年期の読書体験を確認しておこう。

2. 神話への傾倒

2. 1. 北欧神話への憧れ

『喜びの訪れ』では、10 代の前半でルイスが北欧神話を熱心に読んだという経験が書かれている。北欧の神々に興味を抱いたとする当時の様子は「北欧熱」と呼ばれ、「神話の神々に憧れ、畏敬の念すら覚えていた」と回顧されている[24]。「喜び」の原体験に継続して、別世界への憧れを満たしたものが「北欧神話」であったと見ることができるだろう。

ルイスは「北欧神話」に惹かれ、時を同じくして「無神論者」になったと書かれている。その理由はいくつかあると思われるが、その一つは、「『北欧』は信仰も義務も一切必要ない[25]」としていることである。当時の自分は「宗教上の務めを、耐えがたい重荷と考えていた[26]」と回顧されている。つまりキリスト教とは、信仰や義務を要求するものだと思い込んでいたと思われる。そこに「北欧神話」との出会いがあり、ルイスは 10 代前半に「信仰を棄てた」という[27]。自分に過剰な訓練を課すことや、それを達成することから解放されて自由になり、「北欧神話」が取って替わったと判断することができよう[28]。

そうなると、ルイスのこれまでの読書体験について以下のように考えられる。まず、ルイスが心に残るとしている体験は「喜び」の原体験であった。さらに「北欧神話」の読書体験が挙げられていた。これらに共

通する特徴として、死と再生の物語がある。別世界への希求である「喜び」、死と再生の物語である「北欧神話」、それぞれに楽園と死後復活するモチーフが見られる。少年期の「北欧神話」の読書体験は、三つの原体験と同様に「楽園」に惹かれ、死と復活の物語に魅了される体験だった、とまとめておくことができよう。

2. 2.「喜び」の追求をやめる

ルイスの記述によると、その後彼は青年期に哲学を学び、「喜び」の追求をやめたという。その中でサミュエル・アレグザンダー（Samuel Alexander, 1859–1938）の『時間、空間、神性（*Space, Time and Deity*）』（1920）が挙げられている。これにより「喜び」に変化が生じたという。『喜びの訪れ』ではアレグザンダーの「享受」と「観照」がこう説明されている。

> アレグザンダーの哲学の専門用語で、「享受（Enjoyment）」は快楽とは何ら関係がないし、「観照（Contemplation）」も瞑想生活と関わりがない。テーブルを見る時、見るという行為を「享受」し、同時にそのテーブルを「観照」する。その後で見ることをやめ、見ることそれ自体について思索するならば、見ることを観照し、思索を享受することになる。[29]

この考えを受け入れ、「喜び」に当てはめたと書かれている。さらにルイスは続けて、アレグザンダーについてこのように述べている。

> 人間の精神的な働きについての「享受」と「観照」は互いに相いれない行為である。誰でも希望を抱きながら同時に希望について考察することはできない。希望とは希望の対象に心を寄せることであり、ひるがえって希望そのものに目を向けるようにすれば希望を抱くことができなくなるからだ。もちろんこの二種類の活動を早い速度で交替させることが可能だし、現に誰もがそうしている。だが両者は

> 別個の相互に矛盾する働きなのだ。［――略――］人間は自覚することなしに、人を愛したり、不安がったり、物事を考えたりするわけではない。つまり意識と無意識に分けるのをやめて、無意識のこと、「享受」されたこと、「観照」されたことの三つの分類を立てなければならない。
>
> この発見が、わたしの生涯全体に新たな光を投げかけた。「喜び」の期待や探求、つまり、「まさしくこれだ」とはっきり言えるような精神的な満足を見つけようとするのは、すでに「享受」したものを「観照」する無益な企てであることがわかった。(30)

ルイスのそれまでの「喜び」の探求は、すでに「享受」したものを「観照」する「無益な企て」だったと表現されている。さらに「喜び」の探究によって見出されたと思っていたものは「喜び」が過ぎた後の軌跡であり、一種の幻や興奮を「喜び」と取り違えていたと述懐されている。(31) ルイスは、北欧神話に登場する楽園にすら「心を奪われるべきではなかった」と後悔している。

確かにそれらの「喜び」と呼ばれていたものを含むルイスの読書体験は、一時的に心を満たすもので継続的に充足感を与えてくれるものではなかった。ルイス自身が「喜び」を特徴づけて述べていたように、「一時期充足感を与えるが人間の意のままにならないもの」である。ましてや北欧神話の神々に心を奪われることで宗教に替わるものでもない。ルイスが原体験とするエピソード、それに続く読書体験としている「北欧神話」は、ルイスがここで述べていることに当てはめれば、無意識のうちに出会い、そして読むことで「享受」したものである。さらにその読書体験を後年になって思い返すことで「観照」する。いわば過去の体験の回顧なのである。

ルイスの「喜び」の追求はここで崩壊したとされている。その要因として、「喜び」の追求において充足されるものにも限界があるということが挙げられている。さらに加えるなら、「絶対的なもの」の取り組み

から、自らを絶対的主体とすることに限界があることも要因として考えられる。ではルイスはこの先何を追求し、期待し、生きていこうとするのか。それは自らを主体とすることから離脱すると共に、「絶対的なもの」という人間を超越した存在を認識すること、そしてそれに接近する移行に手がかりがあるものと思われる。

3.「回心」体験

3. 1.「絶対的なもの」から神へ

『喜びの訪れ』では「絶対的なもの」を認めた時期を経て、1929 年、30 歳の時に神の接近を感じる体験をしたと記されている。[32] これが、マクグラスが 1930 年として新しい説を提示している出来事である。本節ではその体験に立ち入りたい。

『喜びの訪れ』の記述によると、ルイスは神を「わが対戦者」と捉え、神が「わたしは主である」と言って、自分にゆっくり迫ってくるのを感じたとされている。その時のことをルイスは重要なこととして位置づけている。

その体験はルイスによると、ヘディントン丘を上って行くバスの車内で起こったという。その時は、大学から自宅へ戻る途中であった。そのバスの中で彼は、自らが固い甲羅のようなものを身にまとっている感覚があったとしている。ルイスはそのまま甲羅に閉じこもっていることも、それを脱ぎ捨てることもできると考えたという。

その不思議な一瞬の後、ルイスは自分を溶けはじめている雪だるまのように感じたという。その時のことを「恐れていたことが、ついにやって来た」としている。その後、間もなく彼は、神が神であると認め、自室でひざまずいて祈ったとある。[33] この出来事が、『喜びの訪れ』で有神論へ至ったとされる 1929 年（マクグラスのいう 1930 年）の出来事として書かれている。

さて『喜びの訪れ』は、先行研究者らや読者たちによってこれまで、その記述通りに受け入れられてきたが、それはその記述通りの、実際に

神を感じる体験だったのだろうか。むしろ先に述べた通り『喜びの訪れ』は出版されることが前提であるため、ルイスが自らの「回心物語」を執筆するに当たって都合の良い出来事だけを選び、解釈し、自分の人生の断片を紡ぎ合わせたものと捉える方が妥当ではないか。また、ルイスの記述やマクグラスの指摘から分かるように、本人の曖昧な記憶によって執筆されているため、その詳細な部分については信憑性が低い可能性も大いにある。さらに、読者の中には「回心物語」を読みたいとする人々がいることを想定した上で書かれたことも念頭に置く必要がある。

いずれにしてもルイスはバスの中での不思議な体験を記し、その後に神に祈ったと述べている。だがそれはキリスト教信仰とは別のものであり、神を認めるに至っただけとルイスは見なしている。

3. 2. キリストへの「回心」──トールキンとの対話

ルイスはその後キリストを神の子として受け入れたという。それは書簡により 1931 年 9 月 28 日であったことが分かる。だが『喜びの訪れ』においては、「回心」の最後の段階をよく記憶していないと書かれてある。その記述によると、ルイスは兄たちと動物園に出かけた。兄のサイドカーに乗り「出かけた時には、私はイエス・キリストが神の子であると信じてはいなかった。しかし動物園に到着した時には信じていた[34]」と述べられている。『喜びの訪れ』の冒頭では、「回心するに至った次第を聞きたいとの多くの人々の要望に応える[35]」と述べられているものの、この最終段階の「回心」の部分は非常に短く、割愛されている印象を受ける[36]。

実際に『喜びの訪れ』で記述されていない会話が、その 9 日前にあった。その会話を再構成するために、以下でカーペンター、ウィルソンらによる伝記を一部採用する。

1931 年 9 月 19 日、ルイスは J. R. R. トールキンとヒューゴ・ダイソンをカレッジのディナーに招いた。その食事中、さらに食後に何時間も「神話」について議論していた[37]。

ルイスはキリストについてまだ信じがたいと発言したようである。キリストが受肉してこの世に生まれ、人々の罪の身代わりとなって十字架で死に、死後に甦ったという物語は、自分にとっては何も関わりのあることではない、とルイスは述べ、以下のように発言したとされている。

> 納得できないのは、二千年前に生まれかつ死んだ者の生死が、この現代に、そしてここに生きている我々を、どのようにして助けることができるのかということだ。[38]

ルイスのこの発言に対してトールキンは、キリストの死と復活の物語が本当に起こったことであると訴えたという。

> キリスト教を理解するに至っていないのは、それについて考える時、神話を理解する時に用いている柔軟な想像力を脇において、狭いコチコチの経験主義者のような態度を取っているからだ。君［ルイス］はキリストの物語が「真実の神話」である（the story of the Christ is simply a true myth）ということを、つまり他の神話と同様に我々に働きかけるが、ただ一つ違うのは、それが本当に起こったことだという点を認めようとしない。[39]

ここでの論点は、キリストの受肉、死と復活の物語であった。それを自分とは関係ないと発言するルイスに対し、トールキンは続けてこう語ったとされる。

> その限りでは神話から取り出された教義は神話そのものほどには真実を伝えていない。神話に含まれる思想があまりにも大きくかつ全てを包含しているので、人間の限りある思考力はそれを充分に吸収することができない。だから神の摂理は物語において初めて明らかにされる。[40]

ここでの重要な問題は、「神話」としてキリストの物語を捉えるということだった。受肉、死と復活を「神話」とした時、それは個別の教義などを集めたものではなく、一人の神の子の誕生からこの世での生を終え死後復活するという一つの物語となる。しかもそれはトールキンによれば、「本当に起こったこと」つまり事実として受け入れるに値するものだと言われているのである。

トールキンはこの議論をもとにして、後日「神話創作（Mythopoeia）」という詩を残した。この原稿は「C. S. L. のために」[41]と記されていた。トールキンの息子クリストファーによると、この詩はルイス宛に書かれたものであるという[42]。以下はその一部である。

神話は嘘だ、したがって価値はない、たとえ
「銀のように美しく」語られていようとも、と言った人に。
神話愛好者から神話嫌い氏に

あなたは木々を見て、いと容易に木と名付ける
（なぜなら、木々は「木々」だし、育つのは「育つ」ことだからといって）
あなたは地球の上を歩く、足どりも重々しく
それはあまたの小さな宇宙天体のなかのひとつ
星は星に過ぎぬ、ひとつの球体のなかの何かが
数学的に配置された進路を否応なしに辿ることを強制する
冷たい、無限の空間のただなかを
そこでは原子たちが時々刻々滅びていくように運命づけられている
［――略――］
それぞれを繋ぐものありとすれば、はるか昔の原子にゆきつくのみ
神は固い岩たちを、影なげかける木々を
土に覆われた地球を、またたく星々を創られた
矮小な人間たちは地上を歩み、光と音とに触れて神経をうなずかせる[43]

この詩では、宇宙の天体と人間の小ささが比較され、神が主体となってこの世を動かしていることが示されている。つまり「絶対的なもの」に取り組んできたルイスに対し、その存在とは創造主である神であり、その神により全てが創造されたことが伝えられているのである。

この時の議論の鍵は、作り話としての「神話」の一つと見なされていたキリストの物語を、事実と見なすか否かということ、もう一つはそれがルイス自身に関わる出来事かどうかということであった。トールキンは、神がこの世を創造したことを踏まえた上で、キリストの物語だけを「真実の神話」と主張した。その日 1931 年 9 月 19 日は結論の出ないまま議論は明け方まで続き、やがてそれぞれが帰途についたとされている。[44]

3. 3. トールキンとの対話に関するルイスの書簡[45]

かつて、ルイスが「北欧神話」に傾倒していた経験があることから、「神話」とキリスト教を繋げるトールキンの説明は、功を奏したのではないだろうか。トールキンらとの議論の 9 日後に『喜びの訪れ』に書かれている、動物園に出かけた日がめぐってきた。間もなく彼はグリーヴス宛ての書簡で、キリストの物語を「真実の神話」と見なしてこう書いている。

> ダイソンとトールキンが示してくれたのはこういうことだ。異教の物語における犠牲の考えを、私は全く気にしなかった。神が自らを犠牲にするという考えについては、私はその話が好きだし神秘的で心を動かされた。さらに、福音書以外の話で、バルドル、アドニス、バッカスといった死後に甦るという考えにも同様に、私は心を動かされた。［──略──］キリストの物語はまさしく真実の神話である（the story of the Christ is simply a true myth）。他の神話と同じように私たちに働きかけてくる。しかしその大きな違いは、これが現実に起きたということである。［──略──］
>
> 真実の神話から抜け出すという「教義」の真実味は薄い。というのは、神はすでに、実際の受肉、十字架、そして復活をより適切な

> 言葉で表現しており、それらを我々が我々の概念と認識に翻訳した、それがその「教義」だからである。こう考えることはキリスト教信仰に値するのではないだろうか。[46]

この書簡を見る限りでは、「神話」は「異教の物語」と「真実の神話」とに区別されている。「異教の物語」がかつて愛読したという物語、つまり神々の物語であるのに対し、「真実の神話」はキリストの物語だけである。そして、キリストの物語は他の神話とは異なっていると見なされている。神話の神々と違ってキリストの物語だけが実際に起きたこととされて「真実の神話」と表現されている。つまり、ルイスの「回心」はトールキンの述べたように、キリストの物語を「真実の神話」とした表現を、ルイス自身が認めたことといえる。

この「真実の神話」についてルイスは後にエッセイ「神話は事実になった（Myth Became Fact）」（1944）を残している。そこではさらに明確に、以下のように述べられている。

> キリスト教の中心は、事実となった神話である。神が死ぬという古い神話は、神話でしか語り得ないものであるが、天の伝説と想像力の世界から地上へと降りてきたものである。それは史実に基づき、特定の日に特定の場所で起こった。［──略──］事実になる、ということは神話でなくなるという意味ではない。奇跡になるということである。[47]

ここでキリストの物語は「神話」と表現されつつ、それは「作り話」などの「神話」ではなく、実際に起きたこととして認識されている。これに似た表現として『喜びの訪れ』では、「神話が事実となり、受肉したなら、まさしくこのようになった［死んで復活した］だろう」[48]と記述されている。これらの表現からルイスのキリスト教への過程には、かつて愛読した「神話」が鍵となり、その「神話」によって具体的なイメー

ジをもつことができ、キリストの死と復活を理解できたと見ることができる。

さらにルイスはキリスト教を受け入れた時、かつての「北欧熱」を思い起こして、「別の神々に近づけられていたのは真の神を信じた時のためではないか[49]」と述懐している。このことについてさらなる記述が、『愛とアレゴリー（*The Allegory of Love*）』（1936）に見られる。

> 一神教は多神教のライバルとしてよりは、その成熟した姿と解せられるべきものである。［――略――］神々の背後にいつしか唯一神が現われ、人間同様神々もその唯一神の夢にしかすぎなくなる。[50]

これまでの考察を踏まえれば、ここで書かれている「神々」とは、ルイスにとって「北欧神話」の神々としてイメージされると読み取ることができる。そうなると上記のルイスの表現は、「北欧神話」の神々の背後にキリストがあり、あらゆる神々はキリストが源泉となって描かれたもの、と捉えることができる。

『喜びの訪れ』のタイトルとなっている「喜び」は、楽園や死と再生の物語への憧れであった。それは三つの「喜び」の原体験、「北欧神話」に登場する神々の物語へと引き続いていた。キリストも一旦はそうした神々や、死と再生の物語のうちの一つと位置づけられていた。ルイスは 17 歳の時にグリーヴス宛ての書簡で以下のように述べている。

> 全ての宗教は、いわば単に人間の創り出したもので、全ての神話により適切な名が与えられたものだ。キリストもロキも同じだ。［――略――］宗教とは神話が発展したものだ。[51]

このようにかつては、「北欧神話」の神もキリストの物語も「神話」の一つと見なす言葉を残していた。しかし「北欧神話」などを読むことで、死と再生についてより豊かなイメージをもつことができたと考えら

れる。かつて「キリスト教を離れた」とルイスは述べていたが、結局のところ戻ったのは「神話」の神々の一人と見なしていたキリストのところである。ルイスはキリストをあらゆる神々の源と認め、唯一の神であり真実である「真実の神話」と理解したといえよう。

ルイスは『喜びの訪れ』で「喜び」に関心をもたなくなったと最後に述べている。「喜び」に見られた楽園も死後の復活も、キリスト教に見出すことのできる特徴といえる。ルイスが「喜び」に関心をもたなくなったのは、キリストを求めるようになったからだという理由も挙げられている。結局のところ「喜び」に替わったのはキリスト教であると見ることができよう。

ルイスは、「喜び」からキリスト教への移行を『喜びの訪れ』で述べていた。それはキリスト教を離れてからキリスト教に戻ったという後戻りであるだけでなく、ルイスがかつて愛読した「神話」から「真実の神話」への移行でもあったといえる。この「神話」から「神話」への後戻り、「神話」への傾倒を離れてから「真実の神話」を受け入れる道のりだったと捉えることができるのである。

おわりに

本稿では『喜びの訪れ』を中心に、ルイスの「喜び」と呼ばれる原体験、「回心」について考察した。まず、『喜びの訪れ』において記された「喜び」と呼ばれる三つの原体験を確認した。それらが現実世界から別世界を見ているという現象、ないし別世界を希求している「渇望」であり、またその「渇望」は「楽園」そして「死と再生」への「渇望」と見なせるものでもあることが明らかになった。さらに『喜び』とは、自分の世界とは異なる別世界を遠くから眺める行為であり、それでいて限界があって充足されることのないものと分析した。

また、少年期に「神話」を愛読したこと、それを機にキリスト教に背を向けたという記述を追った上で、「神話」との出会いが、「喜び」に続く読書体験であったことを考察した。さらに、ルイスの「回心」は、キ

リスト教から離れてまたキリスト教に戻ったとされていたこと、結局「喜び」はキリスト教への「回心」によって取って替わったという記述であることが本稿の分析により判明した。そして伝記などからトールキンとの対話を拾い、「神話」がルイスのキリスト教に重要な位置を占めていたことを指摘した。そしてルイスの「回心」は、「神話」から「神話」への道のりであるという結論に至った。

本稿で考察した「回心」は、バスの中やバイクなど、移動中における不思議な体験を書いた『喜びの訪れ』のみによって全てを捉えられるものではない。ルイスの書簡やトールキンの詩を見ると、「神話」を経てルイスがキリスト教を理解する道のりが見えてくる。

神話群の神々とキリストの物語をルイスはかつて同じものと見なしていた。だが、トールキンらとの議論を経て、神々の中でもキリストだけが唯一で他の神々と異なるものであることを認識したのである。『喜びの訪れ』で、「絶対的なものの存在を認めた時、北欧の神々がすでにヒントを与えてくれていた[52]」と述べられていることからもそれを確認できる。それは絶対的なものであり、「喜び」で満たされなかったものを満たしてくれるものであった。

以上の分析から分かるように、ルイスの「回心」は少年期に「神話」へと耽溺（たんでき）した後、一旦離れて再び「神話」に価値を見出し、「真実の神話」としてのキリストの物語へと戻る「逆程」なのである。

ルイスの述べる「回心」後のキリスト教とは、『喜びの訪れ』で棄教したと書かれているような、少年期に感じていた自己鍛錬の義務を課すキリスト教とは異なるものであり、「神話」として知った、死んで甦る物語によって示されるキリスト教である。ルイスはかつて「キリストもロキも同じだ」としていたが、キリストだけを唯一、実際に起こった死と再生の神であることを認識したのである。

注

（1）　現代、徳田幸雄が回心研究を為しており、回心とは罪を意識し救われるよう願うこと、入信すること、などと捉えられている（徳田幸雄、『宗教学的回心研究』、未來社、2005 年、21、44 頁）。ルイスの場合は、幼児洗礼を受け少年期に堅信礼を受けているものの、その時のことを「回心」とは呼んでおらず、32 歳の時であると述べている。その経緯を見る限り彼の「回心」とは、受洗や堅信礼といったものではなく、キリストを救い主として受け入れたことを指していると考えられる。そのため、一般的な回心との区別をするため、本稿ではカッコ書きの「回心」とする。

（2）　ルイスの *Surprised by Joy* は日本語訳の定訳が『喜びの訪れ』となっているため、本稿ではそれを踏襲する。

（3）　Walter Hooper, *C. S. Lewis: A Companion & Guide*, London: Harper Collins, 2005, pp. 13–14, Humphrey Carpenter, *The Inklings: C. S. Lewis, J. R. R. Tolkien, Charles Williams and Other Friends*, London: George Allen & Unwin, 2006, pp. 46–47, A. N. Wilson, *C. S. Lewis: A Biography*, London: Collins, 1990, p. 127 参照。

（4）　Alister E. McGrath, *The Intellectual World of C. S. Lewis*, Chichester: Willey & Sons, 2014, p. 9.

（5）　C. S. Lewis, *Surprised by Joy*, London: William Collins, 2016, p. 270.

（6）　序文に「本書は、どのようにして私が無神論者からキリスト教へ回心するに至ったか、その次第を聞きたいとの多くの人々の要望に応えるために、また、私の回心に関して生じたと思われる多少の誤解を正すために執筆された」とある（*ibid*., p. ix）。

（7）　*Ibid*., pp. 260, 266.

（8）　1930 年 2 月 3 日オーエン・バーフィールド宛書簡（C. S. Lewis, *Letters of C. S. Lewis*, W. H. Lewis, ed., London: Harcourt Brace, 1993, p. 283）。

（9）　Alister E. McGrath, *C. S. Lewis: A Life: Eccentric Genius, Reluctant Prophet*, Carol Stream: Tyndale House Publishers, 2013, pp. 142–143, ――――, *The Intellectual World of C. S. Lewis*, pp. 17–19 参照。

（10）Lewis, *Surprised by Joy*, p. 270.

（11）Hooper, *op. cit*., p. 182.

（12）Lewis, *Surprised by Joy*, p. 4.
（13）この作品は死後出版された（C. S. Lewis, *Boxen*, London: William Collins Sons, 1985）。
（14）Lewis, *Surprised by Joy*, p. 6.
（15）*Ibid*., pp. 14–15.
（16）*Ibid*., pp. 16–18.
（17）*Ibid*., pp. 17–18.
（18）C. S. Lewis, *Perelandra*, London: Bodley Head, 1943.
（19）C. S. Lewis, “Unreal Estates,” *Of Other Worlds: Essays and Stories*, London: Geoffrey Bles, 1966, pp. 86–96: p. 87.
（20）C. S. Lewis, *Miracles*, London: William Collins, 2016, pp. 179–180.
（21）*Ibid*., p. 181.
（22）*Ibid*., pp. 184, 186.
（23）Lewis, *Surprised by Joy*, p. 18.
（24）*Ibid*., p. 87.
（25）*Ibid*.
（26）*Ibid*., p. 68.
（27）*Ibid*., p. 74.
（28）なお、ルイスは自作の神話も少年期に執筆しており、それは 1914 年 10 月 6 日グリーヴス宛の書簡に登場する。ルイスは北欧神話を愛読していることを言及した上で、叙事詩「ロキ」をグリーヴス宛てに送っている（C. S. Lewis, *They Stand Together: The Letters of C. S. Lewis to Arthur Greeves (1914–1963),* London: Collins, 1979, pp. 50–53）。
（29）Lewis, *Surprised by Joy*, p. 253（中釜浩一、「アレグザンダー、S.」、日本イギリス哲学会編、『イギリス哲学・思想事典』、研究社、2007 年、568 頁参照）。
（30）Lewis, *Surprised by Joy*, pp. 254–255.
（31）*Ibid*., p. 255.
（32）*Ibid*., p. 266.
（33）*Ibid*., pp. 260–266.
（34）*Ibid*., p. 275.

（35）*Ibid*., p. ix.

（36）「回心」のきっかけとなったのは、トールキンらとの対話であったということが書簡から理解される。しかし 1950 年代（『喜びの訪れ』執筆当時）には、ルイスとトールキンは疎遠になっていた。そのため、ルイスがトールキンとの対話を取り上げることを避けた可能性もあると推測される。なお、両者の疎遠については 1963 年 11 月ルイスの葬儀後のトールキンの書簡、次男マイケル宛のものによる。「多くの人が私を彼［ルイス］の親友の一人だと思い込んでいた。何ということだ。そのような関係は何十年も前に終わったことだ。私たちは、最初はチャールズ・ウィリアムズの突然の出現［1939 年］によって、次にルイスの結婚［戸籍上 1956 年、司祭による挙式 1957 年］によって引き離された」（J. R. R. Tolkien, *Letters of J. R. R. Tolkien*, Humphrey Carpenter and Christopher Tolkien, ed., London: HarperCollins, 2006, p. 341, Carpenter, *The Inklings*, p. 252 参照）。

（37）Wilson, *op. cit*., pp. 124–127, Carpenter, *op. cit.,* pp. 42–45, Humphrey Carpenter, *J. R. R. Tolkien: A Biography*, New York: Houston Mufflin, 2000, pp. 150–151 参照。

（38）Wilson, *op. cit*., p. 125.

（39）*Ibid*., p. 126.

（40）*Ibid*.

（41）この詩からハンフリー・カーペンターは、1931 年 9 月 19 日にトールキンとルイスらの為された議論を推測して、伝記に記したと述べている（J. R. R. Tolkien, “Mythopoeia,” *Tree and Leaf*, London: HarperCollins, 2001, pp. 83–90: p. 87, Carpenter, *J. R. R. Tolkien: A Biography*, pp. 151–152 参照）。

（42）Tolkien, *Tree and Leaf*, pp. vii–ix.

（43）Tolkien, “Mythopoeia,” *Tree and Leaf*, pp. 85–86.

（44）Carpenter, *The Inklings*, p. 45.

（45）ルイスが「回心」後に福音書を「真実の神話」と表現したことについては、拙論「『真実の神話』としてのキリスト教──C. S. ルイス『神話は事実になった』から」『DEREK』36（2016 年）、立教大学大学院キリスト教学研究科、1–17 頁を参照。

（46）Lewis, *They Stand Together*, pp. 427–428.

（47）C. S. Lewis, “Myth Became Fact,” *Essay Collection: Faith, Christianity and the Church*, Lesley Walmsley, ed., London: HarperCollins, 2000, pp. 138–142: p. 141.

（48）Lewis, *Surprised by Joy*, p. 274.

（49）*Ibid*., p. 88.

（50）C. S. Lewis, *The Allegory of Love: A Study in Medieval Tradition*, Cambridge: Cambridge University Press, 2013, pp. 71–72.

（51）1916 年 10 月 12 日の書簡（Lewis, *They Stand Together*, p. 135）。

（52）Lewis, *Surprised by Joy*, p. 245.

（立教大学大学院キリスト教学研究科博士課程後期課程修了　おかだ・りか）